キャラクター名
黒澤冬璃(くろさわ・とうり)

プレイヤー名

シンドローム	ウロボロス ハヌマーン	ワークス	高校生	カヴァー	高校生
オプショナル		年齢	16(12/12)	性別	男
覚醒	犠牲	衝動	飢餓	初期侵食率	36 %
出自	安定した家庭	経験	喪失	邂逅	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	2	1	0			3
感覚	2	0	0			2
精神	3	0	0			3
社会	1	0	0			1

HP	29
行動値	7
(非装備時)	7
戦闘移動	12
全力移動	24

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃	2		ＲＣ	2		交渉		
回避	1		知覚	1		意志			調達		
運転：			芸術：			知識：			情報：噂話	2	-1
運転：			芸術：			知識：			情報：面影島	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
ストライクチップ		0		7		マイナー使用時エフェクトを使用した攻撃の判定+2D
	射撃	12r+2		2D+7		2D+7/判6D+2D+2D/侵6+6/C8
	射撃	15r+2		2D+7		2D+7/判8D+3D+2D/侵6+6/C7/100↑
	射撃	21r+2		2D+7		2D+7/判8D+6D+3D+2D/侵6+7+6+6+1D/C4/100↑

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

怨念の呪石	
コネ：噂好きの友人/サヴィ	
コネ：要人への貸し/ストーン	

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
賢者の石	P	N		
母親	P 尽力	N 不安		
祖父母	P 尽力	N 隔意		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 2	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
コンセントレイト：ウロボロス	3	2	メジャー			シンドローム		
効果：C-1/下限7								
原初の赤：瞬速の刃	1	3+1				白兵/射撃		
効果：判定+Lv+1D								
背徳の理	3	3	オート					
効果：1点でもダメージを与えた時、そのシーンの間ウロボロスのエフェクトを組み合わせた判定Lv×2D								
リミットリリース	1	6					100↑	
効果：C-1/下限5(1回/シナリオ)								
原初の黒：フルインストール	1	5+2/+3	イニシアチブ				100↑	
効果：ラウンド間判定+Lv×3D(組み合わせ不可かつ1回/シナリオ)								
極限暴走	1	+3	常時					
効果：「1点でもダメージを与えた時」のウロボロスのエフェクトの発動条件に暴走時を追加								
軽功	1							
効果：ハヌマーンのフッ軽のやつ								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

黒澤冬璃(くろさわ・とうり)
コードネーム：“”
年齢：16(12/12)
性別：男
身長：174cm
体重：68kg
髪の色：黒
目の色：水色
肌の色：黄

「俺は黒澤冬璃。……よろしく」
「俺には構わない方がいい。お互いのためだ」

今年面影島に引っ越してきた男子高校生。面影高校2年。人を避けるきらいがありクールな一匹狼だが、根っこは優しいしちゃんと話せば案外会話してくれる。趣味は釣り、料理、読書。引っ越してからは祖母と共に家事をやるようになり、多少ゲームもするようになった。特技は家事全般。UGNに登録されてはいるものの実際に任務に協力した経験はない。とはいえ多少の訓練は積んでいる。戦闘時には、彼の意の通りの形となったストライクチップを、超高速で射出し敵を貫く。

とある街の病院で生まれた。六白傷無とは同年代で、両親も仲が良く幼馴染としての関係を築いた。覚醒以前の彼は明るく、いわゆる陽キャで目立ちたがり屋だった。足が速く、体育の成績は常に上位でスポーツ万能だった。その彼に転機が訪れたのは10年前のこと。とあるジャームに襲われ次に目を覚ました時には傷無の姿はなかった。病死したと聞いたが、あの日のことを思い返すと、何となく罪悪感がぬぐえなかった。両親と共にこの世界の裏側について聞いた。両親は一応理解してくれたようだった。彼も理解はしたが、生活に多くの縛りがつくことに納得はしていなかった。その後なんとか学校に復帰したものの、以前のように上手く笑えなくなっていることに気づいた。以前とは大きく変わってしまった日常に戸惑いを隠せなかった。ある日のこと、とある同級生から理不尽な物言いを